

住まいを取り巻く精霊信仰に関する研究 —タイ北部のクーンの村THNを事例として—

建設工学専攻
住環境計画研究

みそのあかり
御園明里
指導教員 清水郁郎

1. 研究背景と目的

1.1 住まいと宗教観念

本研究は、東南アジアの一農村を事例に、住まいと住まいにまつわる信仰について考察するものである。

これらの関係については、人類学において多く研究がされてきた。住まいには単なる寝食の場という概念では把握できない、象徴的な観念が反映されている。また、人はその住まいで暮らしながら、自らの世界観を再確認、再生産する[山口,1983]。本研究の対象地はタイ北部のタイ・クーン族(以下、クーン)のTHN村である。THN村の各住まいには、3種の祭壇がある。家の精霊の祭壇テーワダー・ファン、土地の精霊の祠チャオティー、そして仏教祭壇のヒンプラである。本研究では特に、寝室に祀られるテーワダー・ファンに着目する。本研究の目的は2つある。1つはクーンの伝統的住居が独自の宗教的世界観との関係でどのように構成されているかを明らかにすること。2つめは、テーワダー・ファンの祭壇が、空間概念を含めた宗教観念を再生産するものと仮定して、住まいと観念の関係について考察することである。

1.2 研究方法

本研究は以下のフィールドワーク調査に基づく。

- ・第1回目調査：2014年9月22日～10月1日(10日間)
- ・第2回目調査：2015年9月15日～9月19日(5日間)
- ・第3回目調査：2016年9月25日～9月29日(5日間)
- ・第4回目調査(長期単独調査)：
2016年12月1日～2017年2月28日(約3か月間)
- ・第5回目調査：2017年7月13日～8月2日(21日間)

内容は伝統的住居の実測(平面/外構/断面図)と住民へのヒアリング全26軒、集落図作成、住まいに各3つある祭壇の詳細実測全20軒分、祖霊の祠の実測全11軒分、村内で行われた諸儀礼の参与観察などである。

2. 調査地概要

2.1 タイ・クーン族

クーンは、タイに多く住むタイ系諸民族のなかでも特に少数の民族である。隣国ミャンマーのシャン州セントウンを故地とし、200年以上前にタイ北部まで越境してきた。一方タイ北部に住む主なタイ系民族は、近年までチェンマイに栄えていたランナー王国のコン・ムアンである。タイのクーンの住居は、コン・ムアンの影響を強く受けてきた背景がある。

2.2 THN村の概要

THN村はチェンマイ市街から南へ約30kmの、ピン川の支流カーン川沿いに位置する。人口は663人、住居は201軒(うち伝統的住居約30軒)ある。生業は農業である。標準タイ語とは異なるクーン語を話し、宗教は上座部仏教と独自の精霊崇拜・祖先崇拜を行う。村の西側には仏教施設であるドンチャイ寺があり、一方で村の中心部にはスア・バーンとよばれる村全体の守護霊が祀られる。また村の北エリアには、このエリアを守護する霊チャオティー・バーンが別に祀られる(図1)。

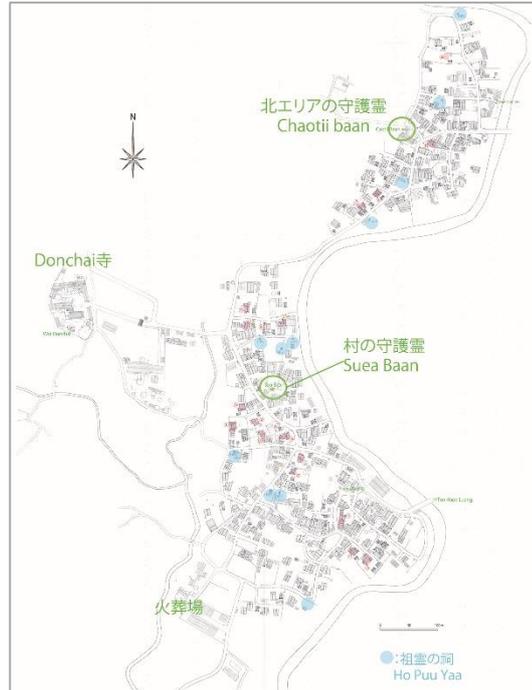


図1 THN村集落図

3. THN村の伝統的住居

3.1 THN村の住まいと祭壇

住まいの平面構成について述べる。THNの住まいの屋敷地はいずれも塀や生垣で囲まれ、母屋、米倉、付属小屋などが配置される(図2)。敷地の一角に、土地の精霊チャオティーが祀られる祠がある。住居は主に木造高床式かつ入母屋屋根であることが伝統的形式とされる。入口の階段を登るとまず広間があり、その東側に仏像を安置したヒンプラという仏教祭壇がある。広間を介して奥には寝室が2つある。世帯主が使う側の寝室に、家の精霊テーワダー・ファンを祀る祭壇がある。寝室の奥には台所がある。どの住居も広間-寝室-台所の間取り形式を持つことが共通する。

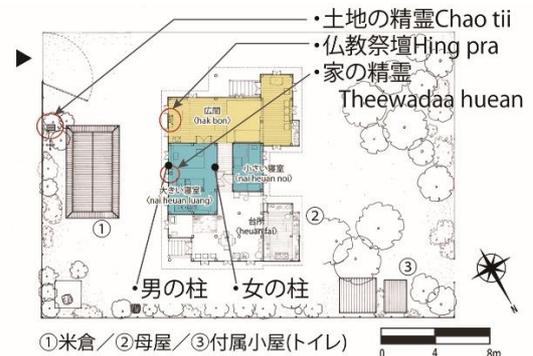


図2 住まいにある祭壇の配置の一例(No.8)

3.2 一般的なランナー式住居

コン・ムアンの伝統的なランナー式住居と比較することで、クーンの伝統的住居の特徴を明らかにする。間取りなどの空間構成は基本的にほぼ同じである。し

かし屋根形態(切妻式と入母屋式)や装飾(妻飾り)といった一部の住居形式と、居室の名称や宗教観念に相違があり、クーンの特徴が見られた。特に寝室の祭壇で、テーワダー・ファンと呼ばれる独自の超自然的存在を祀る点は、クーンに特異なものといえる。

4. テーワダー・ファンとは

テーワダー・ファンは「家のテーワダー」と直訳できる。テーワダーとは、もともとパーリ語から輸入された仏教用語で、タイで守り神の呼び名として定着した言葉である。タイ語で精霊・妖怪を示すピーや祖霊とは区別される。ヒアリングによると、テーワダー・ファンは「家とその家に住む家族を守る」とされる。チャオティーが住まいの屋敷地を守護する一方で、テーワダー・ファンは住居内領域を守護する存在である。祭壇は図3に示すように、板を柱あるいは壁の、目線より高い位置に取り付けた簡素な棚の形態をとる。また祭壇に対する実践として、住居の新築改装時や来客時、その他儀礼等がある特別な日に、供え物(主に生米、水、花)を供えていた。テーワダー・ファンへの信仰が、人々の生活に深く影響することがわかる。



図3 テーワダー・ファンの祭壇の一例(No.13)

4.1 寝室とテーワダー・ファン

テーワダー・ファンは必ず寝室に祀られる(図4)。他の居室が開放的かつパブリックである一方で、寝室は壁で完全に仕切られた個室空間となっている。家族以外の者が入ることはなく、寝室は住人にとって重要なプライベート空間であるといえる。クーン語では寝室のことをナイ・ファン“家の中”と呼ぶ。

また、東は神聖な方角とされる。2つの寝室のうち、東にある方が世帯主の年配夫婦が寝る“大きい寝室”(ナイ・ファン・ルアン)と呼ばれる。もう一方は子供夫婦の“小さい寝室”(ナイ・ファン・ノイ)という。

クーンの住居では、特定の2柱が男の柱(サオ・パヤー)、女の柱(サオ・ナーン)と呼ばれ最も重要な柱とされる。一般的に年配者の寝室内にあり、寝室の東側に位置する柱が男の柱、その向かいに対照的に位置する柱が女の柱である。これらは住居の建設時に一番初めに建てる柱であり、建築儀礼ではこれに各種の縁起物を結びつける。テーワダー・ファンは必ず男の柱のそばに配置される。また、就寝時に東に頭を向けて寝る習慣があり、ヒアリングではテーワダー・ファンの位置を「寝るときに頭のそばにあたる場所」と説明していた。女の柱には何も精霊は宿らないが、男の柱の

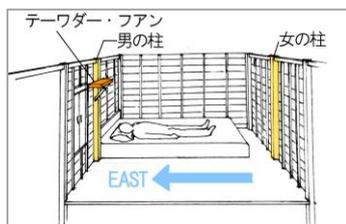


図4 寝室内のテーワダー・ファンを取り巻く観念

対になるものとして

女の柱はなければならない。その理由は「家庭は男女2人でないと築けないため」、また「屋根や軒を持ち上げ支えるためには、物理的に1本ではなく2本必要であるため」と説明される。男女の柱2本が、観念としての住居を支える重要な柱とみなされている。寝室は住居で最も重要な居室であり、テーワダー・ファンをとりまく観念を軸に寝室が成り立つことがわかる。

4.2 引っ越し時の“テーワダー・ファンを移す儀礼”

テーワダー・ファンは、その抛り所となる住居を移るとき、決められた儀礼の方法によって移される。例えば住居の新築、建て替え時や、あるいは住人が引っ越し、その住居が解体される場合などだ。しかし、仮に住人が皆引っ越しても、その住居が空き家として残る場合は、テーワダー・ファンの祭壇も壊されずに残ることになる。テーワダー・ファンは所有者やその系譜ではなく、住居そのものに憑依する存在であることがわかる。

4.3 ケントウンにおけるクーンの家の精霊

Ornsiriによると、クーンの故地ケントウンの住居の寝室では、“男の柱に父方の祖霊が宿り、女の柱に母方の祖霊が宿る”とされていた。柱部分に祖霊が宿り、男の柱に設置される祭壇はその祖霊を祀るものであった[Ornsiri,2005]。先祖の霊が、家を守る家の精霊とされていたのだ。ケントウンからタイ北部へ越境したのち、寝室内にあった祭壇は祖霊からテーワダー・ファンという新しい精霊観念に変化した。その理由のひとつとして、クーンがタイに越境後、上座部仏教の影響を強く受けたことなどが考えられる。

5. THN村の祖霊について

では THN 村において祖霊はどこに祀られるか。THN 村では、祖霊の祠は住居の外、屋敷地の隅や道路の脇に置かれる。小さな住居型の祠で、親族内で本家にあたる世帯のみが持ち、THN 村内には 11 の祖霊の祠があり、ホー・プーヤーと呼ばれる。各親族の初代の祖先が祀られ、祭壇そのものは母系相続される。祖霊は系譜による集団を守護する。年に一度、本家に親族一同が集まり、祖霊供養の儀礼を行う。

6. まとめ

住居(寝室)は必ず 2 本の神聖な柱で支えられ、柱に宿る家の精霊によって守られる。このような住居のあり方・住居観念を、住み手は日々の参拝や儀礼といった実践行為を通して理解してきた。そしてこの観念は、儀礼論に基づけば、世帯を継承した者が代々主寝室を使用し、儀礼を続けることによって再生産されてゆく。テーワダー・ファンが、空間概念を含む住居観念を再生産する機能を果たすのである。

一方で、テーワダー・ファンは祖霊か否かといった民俗的な観念は、周囲の影響を受けつつ変化し、更新されてゆく。住居観念の再生産において重要なのは、テーワダー・ファンに対する日々の行為、ふるまいなどの実践である。家の精霊の本質は、精霊が持つ民俗的な特徴ではなく、家の精霊が住み手の行為を規定してきたことそのものにあるといえるだろう。

参考文献

- 1) 山口昌男「家屋を読む」社会人類学年報,1983
- 2) Ornsiri Panin「Local Wisdom Development and Relationship Between Tai-Kern Vernacular Houses in Chiang Mai and Keng Tung」2005